
戯れる蝶

藍原柚希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戯れる蝶

【Zコード】

Z2302BA

【作者名】

藍原柚希

【あらすじ】

町と海を隔てる巨大な『壁』がある町で育った少年。彼は、毎日その『壁』に上り、夕焼けを見るのを日課としていた。しかしある日、少年は『壁』の上で、黒髪をなびかせた少女に会った。その瞬間から、少年の非日常は、始まった。

行き当たりばったりで書いた処女作です。異世界に少年が連れていかれます。途中でヒロイン視点が入ります。文章やストーリーに稚拙なところがあると思いますが、ご了承ください。

第一話

僕の住んでいる街には、高い壁がある。僕が住んでいる街は、海沿いの町なんだけど、まるで町と海を隔てるよつこ、コンクリートでできた『壁』がそびえたつているのだ。

といつても、防波堤じゃない。その『壁』は幅百メートルほどで、まるで壊されたベルリンの壁のように両端がスパッと途切れている。毎日夕方になると、夕日の光を『壁』が遮り、町に長い影を落とす。明らかに邪魔だから、誰か町民や組合の人たちが取り壊し運動でもしそうなものだけど、親に聞いた限り、そのような話はないそうだ。ずっと昔、ある日突然できたといわれているけど、僕は信じない。

さて、この『壁』が、僕のお気に入りの場所である。正確に言えば、『壁』の上だ。巨人が建てた間仕切りのようなこの『壁』には、鉄製の梯子がついている。僕は放課後、学校が終わるとこの梯子を上るのがほぼ日課となっている。

理由は、『壁』の上から見える景色だ。高いビルも、電柱なんかないまつさらなキャンバスの中に、ただ夕日がゆっくりと沈むさまが描かれるのである。僕はそれを、夕日の光が完全に消えてなくなるまで、じっと見つめる。

『壁』の厚さは、三、四メートルほどで、転落防止用の柵も何もない。正直に言つとかなり危険なのが、それでも僕は毎日来ずにはいられない。母親がこの事実を知つたら、卒倒するだろう。こんなところに登ろうとする奴なんか、後にも先にも僕くらいだらう。

そう、思つていた。

その日は、散々な一日だつた。どのくらい散々だつたかというと、まず、一時間目に帰つてきた期末テストの赤点にやられ、次に、昼休みの弁当が日の丸弁当で（これには昨夜の夫婦げんかが影響したものとみられる）、そして放課後には親友に掃除当番を押し付けら

れた（「悪い、今日テーーーなんだ」）。

おかげで、僕がいつものように『壁』についたのは、空が真っ赤な夕焼けに染まつたころだつた。自転車を梯子のすぐそばに止め、早速『壁』を登りにかかる。手を伸ばして鉄の棒をつかみ、体を引き上げる。そして次の段に足をかける。

登り切つたころには、息が上がつていた。卓球のピンポン玉のような太陽が、今までに田の前で沈もうとしている。

「ん？」

僕は違和感を抱き、夕日から田をそらした。視界にオレンジ色のまっすぐな地面が入る。それはいつものことだ。イレギュラーなのは

僕がいる場所から数十メートル離れたところに、誰かがいたことだつた。

「……」

僕は考えた。僕は中学生のころから、『壁』に上ることを口課としてきた。今年で、三年目にあたる。これまで、幸か不幸か、友達に知られて不審がられることも、また、大人に見つかって怒られることもなかつた。そんな歴史の中で、『壁』の上で人に会つなんてことは、僕にとつて黒船来航のようなものである。

声をかけるべきか否か。

こんなところにわざわざ来るくらいだから、奇人変人のたぐいである可能性も否定できない。いや、僕は例外としてさ。

そんなことをつらつらと考えてころつちに、相手のほうがこつちに気付いたらしい。夕闇の中を、じちらに向かつて歩いてくる。

「こんばんは」

田の前に立つてゐるのは、小柄な少女だつた。長い黒髪を垂らし、服も真っ黒だ。まるで喪服だな。

「こんばんは。君、何してるの？」

「あなたこそ、何しにここに来たの？」

質問に質問で返される。

「何つて、夕日を見に来たんだよ。ここは僕のお気に入りなんだ」「ふーん。まあ、ここ、眺めいいものね」

そういうと少女は夕日のほうにさりげなく皿をやつた。もう半分沈みかかっている。

「でも、ここ危ないから登らないほうがいいと懲りた」「君だって登っているじゃないか」

そこで少女は、僕のほうに向きなおり、ここにと笑つて言つた。

「私は、約束だから」

「は？」

「もう、帰るわ。あなた、名前は？」

「……河野良介」

「良介君か。私は、ミカ。じゃあね」

そういうと、少女はすたすたと梯子のほうへ歩いていく。馬鹿みたいに突つ立つて見送る僕。

ひらりと彼女の姿が見えなくなつた後で、そういうえばあの服装は魔女みたいでもあつたなと思つた時には、もつあたりは完全に闇に包まれていた。

ミカという侵入者に出会つた後も、僕は毎日『壁』に通い続けた。長い梯子を上ると当然のように彼女はいて、『壁』のふちに腰掛け、足をぶらぶらさせついた。

「高校だ」「……」

これは、僕がミカに聞いた当たり障りのない質問のはずだった。

「通つてないわ」

ミカは平然と言つた。さらに続ける。

「ちなみに働いてもないし」

「じゃあ……二ートっ」

「そうなるわね」

ミカは夕日を見たままだ。道理で、いつも僕より先に『壁』に来

ていると思った。

「毎日何してるの？」

「テレビ見たり、本読んだり、ネット見たり」
つまり暇なんだな。ちなみに、ミカは今日も真っ黒なワンピース
だった。夏休みも迫った今日、見てるだけで暑苦しい。

「あなたは丁高校でしょ？」

「うん」

僕が通っているのは、頭がいいとは言えないし、かといって特段
悪いってわけでもない、言ってしまえば平凡な県立高校だった。

「学生生活はどう？」

「どうって言つてもなあ……」

この間は学校のパソコンを誰かがクラッシュさせたとして、少し
騒ぎになつたり、昨日は親友の田中がクラスで最低点を記録したり
したけど、それ以外にこれといって目立つたこともない。野球部は
甲子園出場を見事に逃していたし。

「平凡だよ」

「この一言に頼める。

「いいじゃない、平凡」

ミカは特に関心のない様子で言つた。

僕は以前はぐらかされた質問をもう一度ぶつけてみた。

「ねえ、なんでミカは、ここに来てるの？」

「前にも言つたじゃない、約束だって」

「だから、何の約束？」

ミカは、僕のほうを向いていった。

「ここで待つていればね」

そして、ミカはなぜか言葉をためた。

「お父さんに、会えるのよ」

「はあ？ 祖のお父さん、漁師？」
するとミカは、くすくす笑つて、

「そのようなものよ」

と言つた。

「え、帰りましょ」

あたりはすでに真つ暗だつた。

高校生活で一回田の、夏休みがやつてきた。夏休みが来て、僕は相変わらず毎日『壁』に通つていた。変わつたのは、制服から私服になつたことぐらいいだ。

ミカは、世間が夏休みにならうが冬休みにならうが関係ない、と言わんばかりに、カラスの濡れ羽色をしたワンピースを着ていた。さて、今日、僕には気が重いことがあつた。ミカは、そんな僕の様子に気づいたのか聞いてきた。

「なんか今日の良介君、ピクニッくの前日に雨が降るのか降らないのか心配している子どもみたいな顔してると」

僕は少し言ごよびんで、

「……あのさ」

「うん」

「今度町内会の祭りがあるのは知つてる?」

「ええ」

「一緒に行かない?」

ミカの顔が、固まつた。

「……それつて、デートに誘つてる?..」

「言つなつ、恥ずかしいからー。」

僕は頭を抱えた。

すると、ミカの笑い声が聞こえてきた。

「いいわよ」

約束したのは、午後七時だつた。待ち合わせにはいささか遅い気がするが、ミカは『壁』で夕日を見送つてから来るといつ。僕は、今日は行かなかつた。何となく、普通に待ち合わせをしたかったのだ。今日くらいは。

祭り会場の近くのコンビニで僕は待った。そして目の前に現れたのは、もしかしたら浴衣かもという僕の予想を裏切つて、闇に溶けるような真黒なワンピースを着た、ミカだった。考えたら浴衣での壁を登るのは無理か。

「待った？」

「十分ほど

そう、十分、ミカは意味もなく繰り返し、僕のほうを向いて言った。

「じゃ、行きましょ」

祭りの会場は、なかなか盛況だった。ただ、町内会の祭りなので、規模が小さいのが残念なところだ。

「何か食べたいものある？」

僕はミカに聞いた。

「うーんと、綿菓子」

僕らは綿菓子屋へ向かった。

と、思わぬ奴らに会つてしまつた。

「おう、なんだ、河野じゃん」

目の前にいたのは、田中と、クラスの一昧三人だった。僕は平静を装つて言った。

「なに、男四人で祭り？」

「うつせーな。お前こそ誰だよその娘。彼女がいたなんて初耳だぞ」「彼女じゃないよ。ただの友達。ミカつていうんだ。ミカ、こっちは学校の友達」

「ミカちゃんかー。すっげーかわいいじゃん」

田中の隣にいた有野が言った。飲んでねえかコイツ。

僕は、田中に田くばせした。田中は正確に僕の意思をくんでくれたようだ、

「まあ、若い一人の邪魔をするのは、男の風上にも置けねえな。というわけで、俺らは適当に店冷かして帰るからよ、一人ともよろし

くやつてくれ

田中は、

「ミカちゃん、今度メアド教えてねー」

と未練がましく言つ有野を引きずり、その場を立ち去つてくれた。
そういえばミカは携帯を持つてゐるのだろうか。

「面白い人たちね」

とミカは微笑みながら言つた。

「そうだな」

面白いには違ひない。

「じゃあ、綿菓子屋、行こうか?」

結局、ミカは綿菓子、たこ焼き、リンゴ飴、チョコバナナを食べ

た。

「……食べすぎじゃない?」

「だつて、目に入るたびに食べたくなつちやつて」

太つたミカなんて、想像したくない。ミカは金魚すくいで獲つた

金魚を嬉しそうにつつき、

「ふふ、かわいい」

と言つた。

そうして、なんだかミカの食べる顔ばかりが目に焼き付いた夏祭りは終わつた。クラスの男らには街で会つたびに冷やかされたが、うらやましがれること多かつた。

「だつて、スゲー美人なんだろ?」

そうかな。

さすがに毎日会つと話題はあまりなく、夏休みの間中、僕とミカは『壁』の上では黙つて夕日を眺めていふよつな感じだつた。僕はミカが隣にいればそれで十分だつたし、ミカもそうだつたと思う。その日も、夏の暑い中、僕とミカは『壁』の上で夕日を見送つて

いた。

と、ミカが、突然、口を開いた。

「ねえ、良介君」

「何?」

「私、実はこの町からいなくなつちゃつんだ」

「……引っ越し?」

僕の心臓が早鐘を打ち始めた。

「うん、そんなものかな」

「メールするよ」

ミカが首を振った。

「ううん、駄目なの」

ぱつりとつぶやいた。

「メールも届かない」

「海外?」

「ううん、もつと遠いところ。たぶん一度と会えない」

いつたいどこに行くつもりなんだろう。ミカは僕の田をまつすぐ見つめていた。

「良介君、私と一緒に来てくれる?」

そして、夕日のほうを指差した。

「お父さんが来たの」

最初は夕日の中の小さな黒い点にしか見えなかつた。しばらく見ていると、それが翼をもつて羽ばたいているものだと分かつた。どんどんこっちに近づいてくる。

「どうする? 良介君」

僕は田の前のものにくぎ付けになつてゐる。そんな、まさか。僕は幻を見ているのだろうか。

赤い鱗、大きな角、コウモリに似た翼。そんなゲームの中でしか見たことのないような生物が、こちらに向かって近づいてきていた。どこからどう見ても

ドラゴンだ。

「一緒に来てくれるなら、手を握つて。そうしたら、お父さんは一緒に連れてってくれるわ」

そう言ってミカは、こちらに手を差し伸べる。
どうする？僕。ミカは、これからありえないところへ旅立とうとしている。

僕の頭の中には、親友の顔やクラスの仲間の顔、両親の顔が駆け巡った。そして、最後に ミカの笑顔。

僕は、ミカの、白くて小さな手を握りしめた。ミカは泣き笑いのような顔で、微笑んだ。

「ありがとう、良介君」

そして、一人で、迫りくる巨大な影に向き合つた。大きい。二階建ての家くらいはある生き物が近づいてくる。もう田の前だ。僕は田をつぶつた。

思いがけない優しい手つきで、僕は地面からすくい上げられた。田を開けると、町のはるか上空を、僕たちはドラゴンの手の上に乗せられて飛んでいた。

こうして、僕たちは今までの世界からさらわれた。

第一話

ずっと飛び続けていたドラゴンが、下降し始めた。僕の体は冷たくて強い風で、ガチガチになつていたけれど、ミカの手は握りしめたままだつた。

やがて、険しい岩山が見えてきた。ドラゴンは、その岩山の、からつじて平坦になつているところに着陸した。

僕は、ドラゴンの手から飛び降りた。揺れない地面に、ほっとした。

ミカが後に続く。

僕は改めてドラゴンを見た。間近で見て目を引くのは、光沢のある堅そうな鱗だった。天然の鎧だ。

「ミカ、このドラゴンが、君の父親って、どうゆうこと？」それに「じー、じー？」

「まず、じーがどこか説明するわね」

ミカが、岩山の下のほうに広がる森のほうに腕を広げた。
「じーは、サルバタ王国。地球上のじーにも存在しないはずの国よ」「地球上のどこにも存在しないはずの国？」

僕は繰り返した。

「そう。そしてこの国では、あらゆる理屈が通用しないわ」

「それってどうゆう」

意味、と僕は続けよつとして、言葉を飲み込んだ。ミカの指先には、火がともつていた。

「ミカ、それ、どういう手品？」

「手品じゃないわ」

ミカは指先の火を吹き消していった。

「じーの国には、魔法があるの」

魔法？

「ミカ、ゲームのやりすぎだよ」

「失礼ね。今、やつて見せたじゃない。それに、ドラゴンに乗つてこの国に来たのはどこの誰よ」

ミカは口をとがらせた。

「ミカ、もしかして飛べる?」

僕は冗談のつもりで言った。

「飛べるわ。今はやらないけど」

僕はミカをまじまじと見た。真つ黒な服装。まさに魔女だ。

「で、お父さんのことだけど」

とミカは、ドラゴンのほうを向いていった。

真つ赤で大きなドラゴンは、今は犬で言つ「ふせ」の体勢で休んでいる。

「ある強力な魔法使いに呪いをかけられて、この姿になつたの。それ以来、ずっと隠れて暮らしてゐるの」

「ミカは、この国の生まれなの?」

「そう。でも、お父さんが呪いをかけられたときに、私は『外界』私たちが元いたところね に逃がされたの。『私が十七にな

つたら必ず迎えに来るから』って言われてね」

それでミカは、毎日『壁』に上つていたのか。父親の別れの言葉を信じて……

その時、僕のおなかが鳴つた。そういうば、晩御飯も、朝ごはんも、食べていない。あれ? でも、一晩中飛んでいたような記憶はなかつた。『外界』と王国とでは、時間の流れも違うのだろうか。

「おなかすいたね。下で何か探そつか」

ミカが森を指差して言った。

「ねえ、ミカ」

「なに」

「魔法が使えるんだつたら、何か食べ物出せないの?」

ミカはにっこり笑つて言った。

「魔法はそういうのじゃないの。それこそゲームのやりすぎよ」

そして、僕の手を取ると、崖から飛び出した。

「わわっ！」

僕はあわてたけど、その必要はなかった。僕たちは、ゆっくりと、森に向かって下降していく。

すごい……

ミカは他にどんな魔法が使えるんだろう。

森には、見たこともない形をしたピンク色の果物が、たくさん実つていた。ミカは一つちぎって皮をむくと、においを嗅いだ後、がぶりと食べた。

「んんっ！　おいしー！　食べてみてよ、良介君！」

僕も一つちぎって食べた。今まで食べたことのない味だったけど、確かにおいしかった。

両腕に抱えきれないほどの果物を持たされて、僕はミカと一緒にドラゴンのところに戻った。

「お父さん、疲れて眠っちゃったみたい

確かにドラゴンは、ゴウ、ゴウ、と寝息を立てていた。

「じゃっ、食べよっか！」

ミカは僕の抱えた果物の山から、ひとつを手に取った。

結局、ミカはリング大ほどもある果物を、六つも食べた。それでよく太らないな。

「新陳代謝がいいの」

それでも食べ過ぎだつて。

僕は三つで満腹になった。

「ここはこの国のどのあたりになるのかな」

森の向こうの遠くに、町らしきところが見えた。

「ここは、サルバタ王国の、西の端ね」

ミカが、地面に木の棒で地図を描いてくれた。三角フラッグのような形だった。

「ここが、私たちが今いるところ

と、ミカが、棒で三角の左隅を指す。そして、三角の真ん中らへんに、バツ印を描いた。

「で、ここが、首都タルメニア。大きな都市よ」と、突然、声が割り込んできた。

「おい貴様たち！ そこで何をしている！」

驚いて声のするほうを振り向くと、五人の鎧を付けた兵士がいた。「何つて……ピクニックです」

とミカが言つた。兵士の一人が叫んだ。

「ふざけるな！ そのドラゴンはなんだ！」

「このドラゴンは私のものです」

とミカが言つた。

「ドラゴンの飼育は、ドラゴン規制法に重大に違反することになる！ よつて、貴様らを、直ちにラノミールへ連行するー！」

「起きて！」

とミカがドラゴンに叫んだ。ドラゴンは起きると、大きな雄たけびを上げた。

僕はとつたに耳をふさぐ。

「逃げるよー！」

ミカに手を取られ、僕はドラゴンのほうへ向かつた。

「止まれー！」

剣を持つた兵士が追つてくる。

と、ドラゴンが、がくりと倒れた。

「お父さんー？ どうしたの、お父さんー！」

「ドラゴンに乗つて逃げようとしてもそつはいかんぞ」と、兵士の中の一人が言つた。

「縛り上げろー！」

たちまち、僕たちは、縄でぐるぐる巻きにされてしまった。そして、兵士五人に囲まれる。

「戻るぞ」

と兵士の一人が言つた。僕たちの目の前に光の輪が現れた。輪の中

の景色は、その部分だけ切り取られたように、違っていた。僕たちは追い立てられるように、輪の中を通らされた。

「お父さん！ お父さん！」

ミカは何度も叫んだが、ドラゴンは倒れたままだった。

僕とミカは、別々の地下牢に入れられた。暗くてじめじめとしていた。昼食には、硬いパンと水が出された。

「どうしよう……」

まさか、異世界に来てそういう、捕まるなんて。ドラゴン規制法とか言ってたな。ということは、この国ではドラゴンは違法なのかも。ミカは無事だらうか。

うじうじと考え方をして、夜が来た。

硬い地面で、なかなか寝付けなかつたけど、やつとうとうとし始めたころ、僕はガチャリという音で目が覚めた。

起き上がると、ミカが、僕の部屋の中に入つてくるのが月明かりで見えた。

「ミ……」

シーツ、とミカは口に人差し指を当て、

「逃げるよ、良介君」

と小声で言つた。

抜き足差し足で外に出ると、ミカは僕の手を握つたままふわりと浮きあがり、刑務所の壁を超えると、少し離れた野原に軟着陸した。ふーっ、とミカが息を吐いた。

「ここまでくれば、ひとまず安心だね。しばらくしたら、また飛んで、離れた町に行きましょ」

「ねえ……ミカ。どうやって牢を出たの?」

「魔法で力ギを盗んで」

とミカは言つた。

「私が魔法使いだってのがバレてなくてよかつたわね

じゃなかつたら、絶対出られなかつたはずだから、とミカは続けた。

「ここまま君のお父さんの所に戻るの?」

と僕は聞いた。ミカは首を振りながら、

「それは無理。ここ、ラノミールはね、朝説明した、首都のすぐ横にある刑務所なの。今の私じゃ、お父さんのもとへは簡単には戻れない。遠すぎるもの」

「じゃあ、どうするの？」

「さつきも言つたとおり、もう少ししたら、もつと離れた町まで飛ぶの。きっと朝になつたら、脱走がバレて、大騒ぎになるから」

「そしてどうするの？」

「仕事を探さなきや」

とミカは、現実的なことを言つた。

じゃあ、行こうか、と、ミカは再び僕の手を握り、ふわりと浮きあがつた。僕の足も地面から離れる。

しばらく、月明かりだけが頬りの闇の中を、スースとすべるようになに進んだ。

時々、あぐいが出た。ろくに眠つていなかつてある。僕たちは、休憩をはさみながら、まっすぐに飛び続けた。

飛び続けていくうちに、だんだんと、左の空が明るくなつてきた。

「もう、いいかしら」

とミカがつぶやいた。

近くの野原に着地した。

すると、ミカは地面にぐつたりと横になつた。

「ミカ！？」

僕は驚いてミカを揺さぶる。ミカは声を出すこともつらそうに、たづらつらと、

「大丈夫よ、良介君……ただ、私こんなに長く魔法を使つたことなかつたから……」

少し眠るね、と言い残して、ミカは目を閉じた。

僕も、正直、眠かつた。

でも、二人して眠るには、ここはあまりにも不用心だ。ところどころで、僕はミカの横に座つて、寝ずの番をすることにした。

……はずだつた。

気が付くと、僕はあぐらをかけて腕を組んだ格好のまま、寝ていた。日は高く昇っている。僕は何もない野原を見て睡然とした。

ミカがいない。

「ミカー！ ミカー！」

僕は叫びながらあたりを見回した。人つ子一人いない。何てことだ。さらわれたんだろうか？

僕が途方に暮れると、

「良介くーん」

と、聞きなれた声がして、僕は上を見上げた。

真つ青な空を背景にして、ミカが空を飛んでいた。何かを両腕に抱えている。ミカは僕の前に着地していった。

「見て！ この果物！ すっごくおいしそうでしょ！ 近くの森で見つけたの！」

そうして、自分の両腕に抱えた真つ赤な果物を僕に見せる。しかし、僕は聞いていなかった。

「……ミカ、どうして、僕に何も言わなかつたの？」

僕は怒っていた。これ以上ないくらいに。

「え、だつて、良介君、眠つてたし……」

「それでも起こして一言言えよかつただろ！ 僕はミカがさらわれたんじやないかと思つたんだぞ！」

突然声を荒げた僕を見て、ミカの顔は青ざめた。

「……ごめんね、良介君……心配かけて……」

「いいよ、もう」

僕はミカに背を向けて、座り込んだ。ミカはそんな僕の背中をちよんちよんとつづいた。

「……何？」

僕が不機嫌に言つと、

「……食べる？」

手には、自分が取つてきた果物。

「……うん」

食べ物を目の前にすると、自分がとても空腹だったことに気付いた。

僕が果物を受け取ると、ミカは安心したように笑った。

「さつき飛んだときに見えたんだけど」

ミカが遠慮がちに言った。果物に伸びる手には依然として遠慮はなかつたけど。

「ちょっと歩いたところに、町が見えたの。そこで仕事を探さない？」

「そう簡単に見つかるかなあ」

僕は三つ目の果物をかじりながら言った。味は桃みたいだった。

「なんとかしなきや」

と、ミカが五つ目の桃もじきを食べながら言った。

「じゃないと、お父さんの所へ戻れないし、それからお父さんを元に戻すこともできない」

確かに、もう簡単に果物が実っている場所が見つかるとは思えない。

僕がそのことを伝えると、ミカの顔が曇った。上田づかいに僕を見て、

「あのね、良介君、怒らないで聞いてくれる？」

「……内容次第だけど」

「実はね、この果物、盗んできたの」

「はあ？」

「どうしても食べ物が見つからなくて、畠っぽいところがあつたから、つい……」

ミカはしょんぼりとしている。

「僕はいいけど……一回田は絶対捕まるとと思うよ」

「うん、だから、どうしても仕事を見つけないと」

ミカは、六個田を口に入れながら言った。

「うーん、住み込みでねえ……。しかも一人となると……」
豊かなひげを蓄えたおじさんがうなつた。おなかが太鼓のよう膨れている。

「うちは誰かが泊まるようなスペースないからなあ」「そうですか……」

ミカが、気落ちした声で言った。

住み込み、二人一緒。これが、僕たちの仕事探しの条件だった。なかなか見つからず、これで五軒目だった。

僕たちは肩を落として店を出た。と、店の店主が、巨体を揺らして追ってきた。

「おーい、君たち！」

「なんですか？」

ミカが言った。店主はゼエゼエ言いながら、「二人まとめて雇つてもいいという人がいた。住み込み可でだ」「本當ですか！」

僕たちは声をそろえて叫んだ。

「いやー、ちようび、雇つてたもんが三人も辞めてのー」と白髪で短髪の店主が言つた。御年七十らしい。僕たちが雇われたのは、古びた居酒屋だつた。

「いやー、若いもんが一人も入るのは、こちとしても助かるんの一。特にそちらのお嬢さんは美人じゃのー」と店主はミ力を見ていつた。

こうして、僕たちは働き場所を得た。が、居酒屋に入った途端、

「親父！ またホイホイ人を雇つてきて！」

という盛大な怒鳴り声に迎えられた。

「しようがないじやろー。お前が三人も辞めさせるんじやからの一「それも親父がろくでもないやつばっかり連れてくるからじやねえか！ 今度もなんだ！ 変な服着た奴ら引き連れて！」

店主の息子は、ギロリと僕たちをにらんできた。僕たちの格好は、『外界』から来て、そのままだつたから、この中世ヨーロッパのような世界の中では、いささか浮いているのかもしれない。通りを歩いているときも、ジロジロ見られていたし。

「人を見た目で判断するんじゃないよ。この子らは若いし、きっと一生懸命働いてくれる」

「はー！ 身を粉にして働きます！」

ミ力が威勢よく言つた。僕もあわてて、

「頑張ります！」

と言つた。店主の息子は鼻をふん、と鳴らし、

「目いっぱいコキ使ってやるからな。後悔しても知らねえぞ」と言つた。こうして、僕たちは居酒屋『白魚亭』で働くことが決まった。

「……なんか悪いね

ミカが、「じちや」「じちや」と物の置かれた僕の部屋を見ていった。あ
いているスペースは畳一畳分しかない。ここは、僕が寝泊まりする
ために与えられた物置部屋だった。ちなみにミカの部屋は、一応ベ
ッドが置いてある、簡素だが清潔そうな部屋だった。

「いいよ。泊まるところがあつただけで十分だし」

僕は肩をすくめて言った。

パリーン！

これは、僕が皿を割った音。すかさず店主の息子 ダグさんと
「うそうだ の怒号が響く。

「ゴラア！ 何枚皿割りや気が済むんだ！ 給料減らすぞ！」

「すいません」

僕は頭をペコペコ下げながら皿の破片を集めた。

『白魚亭』で僕に与えられた仕事は、雑用係（主に皿洗い）だつ
た。ミカは、ウェイトレスだ。ミカの涼やかな声が、時折店内に響
く。

「いらっしゃいませー！」

ダグさんの怒号よりも、ミカの声のほうが、店のほうも響かせが
いがあるだろ？

まかないは、おいしかった。料理はダグさんが担当していて、パ
エリアのようなどんぶりや、スペイスの効いたカレーのような煮物
など、バラエティに富んでいた。

「いやあ、ミカちゃんがいてくれるおかげで、お店のお客さんが増
えたわあ

「というのは、ダグさんの奥さんだ。朝食と夕食は、この人のお世
話になつていてるのだが、これまたおいしい。

「当たり前じゃのー。これだけ美人なんじゃからのー」

と店主が言つ。

「そんなことあつません」

とミカが謙遜する。

「まあ、前の三人に比べりや、ましだな」とダグさんが言った。

僕はある時、ミカに聞いた。

「ねえ、ミカ、この国には魔法があるし、ミカは魔法使いだよね」

「うん」

「なのにこれまで、全然魔法を使っている人を見ていなんだけど、なんで?」

するとミカが声を潜めて言った。

「この国ではね、魔法を使える人はつかまって、どこかに連れて行かれるのよ」

「ええ?」

と僕は聞き返した。

「だから私は、自分が魔法使いであることを隠してるの。良介君も、私が魔法使いだってこと、他の人に言っちゃ駄目よ」

「うん。わかった」

そして、一ヶ月たつた給料日。僕たちは念願の、お金を手に入れた。

「一か月、この苦労だったのー」

と店主が言い、

「割った皿の分は、引いといたからな」とダグさんが僕に言った。

「はい」

と僕はうなずくしかない。

「どのくらいだった?」

と、ミカが僕の給料袋を覗き込みながら言った。

「このくらい」

僕はミカのベッドの上に中身をひっくり返した。

小さな金貨の小山ができる。

「私は、このくらい」

ミカも僕のまねをする。ミカが作った金色の小山は、心なしか僕のものより大きく見えた。

「どのくらいここで働けばいいんだろう」

と僕が言った。ミカは金貨を手で十枚ずつに分けながら、「そうだね、三、四か月は働いたほうがいいかも」

と言った。そうしたらお父さんのいるところに何とか戻れるかもしれない、と続けた。

「長いなあ」

僕は天井を見上げて言った。

「大丈夫」

とミカは言った。

「きっと」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2302ba/>

戯れる蝶

2012年1月8日20時45分発行